日本声楽発声学会

学会通信

第7号

会員の皆さまへ

理事長　米山文明

学会通信第7号をお届けいたします。前任期の反省を含めた総括は前の6号で述べました。今期の理事長の委託は本年5月の総会当日でしたので、皆さまに就任挨拶を申しあげるのみで、新年度の抱負、方針を示す時間がありませんでした。学会誌発行も来年になりますので、新年度に向けての私の考えの一端を申しあげます。

(1)理事選挙について：大綱は会則にありますので、補足意見です。当初私は選挙による選出者10名のみで行くつもりでした。これなら自薦、他薦を含めて単純に投票数だけで決まるので分かり易いと考えたからです。ところが新年度3年間の続行すべき仕事と、将来の学会の発展路線を築くために新進気鋭の新鮮な戦力を育てることも必須な条件と痛感しておりましたので、総会当日理事長指名を受けた直後に、前から私の腹案として持っていた小川昌文、池田京子両理事を新しく加えました。両理事の紹介を皆さまに説明する時間がなかったのと、小川理事も海外出張中ということもあり、本号に両理事の略歴を入れましたのでお読みください。

もう一点は前期3年間で折角緒についたばかりの「発声教育」部門も未完成のままでは無責任になりますのと、後述します新委員会設置のために旧理事の一部の方にも残っていただきました。

なお、選挙の候補者に関する資料不足と選挙運動を加えよ、とのご意見もありますが、広報の拡大は比較的容易だと思います（たとえば、印刷費の規定超過分を限度内で本人負担にするなど）。ただし、候補者の実績をすべての人に同程度知ってもらうことは不可能です。たとえば理論研究者でも著名な教育関係者を知らないということもありえます。会員の多くに知ってもらう最も必要で、重要なことは学会の場での活動（研究発表、論文投稿、研修会、研究会での活発な発言など）だと思います。

学会外で著名であっても、学会内での活動がないと多くの会員に知ってもらうのは難しく、選挙運動するよりも学会内での研究発表、討論などを活発にすればどなたにもわかります。

(2)「発声教育」について：本学会の運営が「教育」に偏りすぎているというご意見があります。本学会会則第4条目的の項に「本会は声楽発声およびその指導法の進歩発展に寄与することを目的とする」とあります。そして皆さまから選出された理事会は過去何期かにわたり、活動方針として「演奏」「理論」「教育」をメインの3本柱としてきました。そして理事会も常にこの3部門に分かれて、それぞれの活動を分担しています。前期からの理事会活動の中で「教育部門」が突出して見えるかの印象を与えているとすれば、前々期までほかの2部門に較べて「教育」の活動がなかったか、あまり目立たなかったからではないでしょうか。「発声教育」そのものが日常話声、歌声すべてにわたって明治以来闇に葬られたまま放置されつづけられ、立法府、行政府いずれもがそれを無視しつづけたため、あえて極論すれば「発声教育」がなくても歌うことはできる、歌はうまくさえ歌えれば自己流でも人真似でもよいという一面もあったのではないでしょうか。歌声や会話声について義務教育でもまったく手をつけておらず、ことばや文字を教師の基準通りに読め、書け、歌えればよいとされてきました。声の出し方の改善、指導がなされないまま、現在でも音楽大学、教員養成大学で専門の歌手や教師を養成する学校すべてに「発

声」という公式科目はないし、発声指導者という公認資格教師もいないという惨状です。

歌唱、理論いずれの分野においても「教育」がなければ生徒を育てることもできず、教育を抜いて演奏も理論も成立しないはずです。また、「音楽教育学会」に任せればよいとの意見もありますが、「音楽教育学会」はすべての音楽教育（ピアノ、弦、管、理論……）にまたがっており、声楽に必須の発声教育の確立は、本学会こそが主導すべきだと思います。数十年前から私は、故柴田睦陸先生には個人的に進言していましたが、実現できませんでした。

私は「発声教育」だけを重点的にやっているつもりは毛頭ありません。演奏、理論両専門部門の担当者、会員の方々が積極的に活動されれば、教育突出ではなくなりますし、お互いに競い合ってこそ本学会発展の正しい姿だと思います。最後に上記以外の実践項目目標を要点のみ述べます。

(1)新委員会設置

①教育小委員会（幼・小・中・高）：年齢別に小委員会をつくり、それぞれ全国会員の中から実地経験のエキスパートを選び、発声教育要綱をまとめる（詳細は後日発表）。教育部門委員会のこれまでの記録を学会誌別刷につくる。

②渉外、広報委員会：ホームページ開設他。

③40年誌制作委員会：記録の整理保存のため。

④用語委員会：従来のものを拡大する。

(2)そのほか例会、学会誌の再検討、改善（ディベート、フォーラムの導入など）

皆さまの忌憚なきご意見、積極的参加を熱望しております。

新理事のプロフィール

池田京子　東京芸大卒、同大学院修了。文化庁オペラ研修所修了。ドイツ政府給費留学。「題名のない音楽会」「直純と歌おう」出演ほか、日フィル、新日フィル、東響等国内のオーケストラと共演。CD「花の歌」（ロベルト・シュトルツ作曲の「花の歌」10曲をメインにマーラー、シューマン、シューベルトその他花をテーマにした名曲集）をリリース。愛知県芸術文化選奨受賞。二期会会員、信州大学教授、武蔵野音大講師。

小川昌文　東京芸大声楽科卒、同大学院音楽研究科音楽教育専攻修了。インディアナ大学音楽学部博士課程音楽教育専攻修了。上越教育大学教授。音楽教育学博士。専門は音楽教育学、合唱。テーマは音楽教育の理念と哲学的研究、音楽教員養成の点から見た国際比較、学びの成立、合唱と音楽教育の関連、その理念と実践など。

◇教育部会メンバー募集について◇

このページの左欄にあります(1)新委員会設置①教育小委員会のメンバーを募集いたします。教育現場に携わっておられる方、研究を重ねておられる方等々、この分野に関心をお持ちの皆さまと共に今後のわが国における声楽発声および発声教育の確立を目指して研鑽を重ねて行きたいと思います。

新しく発足する教育小委員会は、①幼児期(3～6歳）②学童期(6～12歳）③思春期(12～18歳）とします。今後の進め方は

1、メンバー（理事、会員、関係者）の決定は本年末。

2、第1回の会合は来年1月末ごろ。

3、その後の会合は年4回くらいの予定で開催。

なお、これらの会合は共に研究を進める会でありますので、交通費の支給はありませんが、ぜひ会員の皆さまの熱意をお寄せいただくよう念じています。参加ご希望の方は11月末日までに、お名前、所属（勤務先など）、担当分野①②③（複数可）を明記のうえ、事務局にFAX.またはハガキでご連絡ください。

事務局長　川上勝功

◎音声医学面からのトピックス２件

紙数の都合上今回は（Q&A）を休み、本学会と関係ある最近の医療面での情報をお届けします。

（1）「臨床音声研究会」の創立：近年地方の会員から、音声障害について相談できる医師を紹介してほしいという要望があります。そこで本学会の会員を中心にした医療関係者（主に耳鼻咽喉科医）で、対応に困るような症例を持ち寄って治療方針を検討しようという集まりをつくりました。すでに２回行っており、毎年２回の学会例会前日（土）の夜に決まっております（17:30～20:30)。結節やポリープを手術すべきか否かなど、日常多くみられる音声障害への対応の仕方を討論します。現在、宮崎、富山、大阪、東京など７～８名の医師会員が中心ですが、どなたでも参加自由ですから(医師でなくても)、ご希望の会員は事務局に問い合わせてください。音声言語障害の医療を志す医師の勉強会です。

（2）「日本演奏家医学シンポジウム」（演奏家の健康をめぐって）という会ができました。第１回のシンポジウムを平成16年７月19日に開きました。ヨーロッパではすでに活動していますが、日本にも「芸能医学」を独立させたいという私の念願でもあり、以前から「芸団協」という総括団体に何度か働きかけておりました。今回は次のようなプログラムで行いました。

- 酒井直隆（横浜市大整形外科）：ピアノと弦楽器奏者の手の障害（腱鞘炎など)。
- 根本孝一（防衛医大整形外科）：管楽器奏者の手の障害)。
- 根本俊男（歯科医）：歯の障害と演奏家。
- 小林武夫（耳鼻咽喉科）：声と神経障害。
- 米山文明（耳鼻咽喉科）：声楽家の声の障害。
- 関伊佐央（芸団協）：演奏家の健康と生活障害。

スポーツ医学のように、喉の障害（俳優、歌手)、手の障害（ピアノ、弦奏者)、足、腰の障害（舞踊家など）に対応できる芸能医学をつくる必要があると思っています。今後どのように発展させて行くかが課題です。行政との関係、心療内科、精神科、東洋医学その他の医学各科との連携や組織づくりなど。　(F. Y)

〔海外だより〕

Bundesverband Deutscher Gesangspädagogen

ドイツ連邦声楽教師連盟 2004 年度年次総会に出席して

川村英司

BDG の年次総会は４月 30 日～5 月２日までヘンデルの生まれた町ハレ(Halle）の音楽大学で開催されました。毎年４月中旬頃にドイツの都市で開かれ、これまでにミュンヘン、フライブルグ、ベルリン、デットモルト、ニュールンベルグ、カールスルーエといった各地の音大で行われています。来年はエッセンの音大で４月８日～10 日まで開催される予定です。

今年のプログラムから一部を紹介すると、初日(30 日)では、下記のようなものがありました。

- English Diction for Singers
  Prof.Dr.Katherine Kelton
- Come si parla?
  Prof.Maria de Francesca-Cavazza

[講演]

- Das deutsche Rezitativ von Gluck bis R.Strauss

[公開講座]

- Stilstik in der deutschen Romantik
  Lied von Schubert, Brahms, Mahler
  Ks. Christa Ludwig

朝の９時から夜の９時過ぎまで、充実した内容でとても勉強になりました。BDG のホームページ http://www.bdg-online.org/bdg.htm に詳細な記載がありますのでご覧ください。

ドイツ語での会議ですが、皆さんも参加されると得ることは多いと思います。私は毎年参加していますが、大阪芸大教授の月岡先生ご夫妻も熱心にいつも出席されています。

〔長野支部だより〕

◇　　第５５回例会

７月２４日（土）　長野市城山公民館

内容・講義と実習　夏は来ぬ　浜辺の歌

・公開レッスン　講師池田京子（信州大学教授、本学会理事）

・ハイルマン氏の公開レッスン VTR の視聴　・総会

飯田忠文会長の司会進行の下、和やかにして熱気溢れる一日でした。また、同市では５月９日に声楽家集団「土の会」のオペラ公演「おこんじょうるり」林光作曲、「泥棒とオールドミス」メノッティ作曲が開催され、飯田・清住真達氏ほか本学会会員・関係者も出演し好評でした。

〔会員だより〕

◆CD 紹介◆

◇平松英子会員の新しい CD。湯浅譲二作曲「新しいこどものうた」（ミュージックスケイプ社）で、名曲と名演が素晴しく、日本歌曲の新しい時代を予感させます。「音楽之友」「レコード芸術」等音楽ジャーナリズムでも高く評価されています。楽譜も出版されています(音楽之友社)。

◆新刊紹介◆

◇　*Stimme von Fuß bis Kopf*

Maria Höller-Zangenfeind 著

Studien 社　Innsbruck

Atem-Tonus-Ton メソードに基づく

呼吸と声のための指導書

私はドイツにある著者の呼吸学校で学び、ディプロマを取得後、声に関わる様々なジャンルの方々に、このメソードを指導実践しています。

Atem（呼吸）、Tonus（バランスのとれた筋肉緊張）、Ton（声あるいは音）は、体育学、声楽を学び、Ilse Middendorf 教授の下で呼吸法を修めた著者が、呼吸法指導者として自らの豊富な経験に基づき研究開発した理論です。これまでの発声教本ではあまり取り上げられなかった"Atem-Tonus-Ton"という概念が発声時の肉体・精神の両面に有効かつ重要な働きをすることをも解き明かしています。

生理学と精神医学の観点から裏付けされつつあるこのメソードが、指導の現場や演奏の場面で力強い助けとなることでしょう。具体的でわかりやすい言葉で記され、多くのイラストと練習用の CD がついていることも実用的です。

本学会理事長で、発声教育の発展に情熱を傾けてこられた米山文明先生の序文には、著者への絶大な信頼と期待が溢れています。多くの方が、このメソードと出会い、実践されて「足から頭までの声」を獲得されることを願ってやみません。

（波多野由美子会員 呼吸と発声法指導者 ソプラノ）

◆演奏会◆

◇　第２７回　桐の会サマーコンサート

８月 15 日　於熊本市総合女性センター

本学会元会員岩津範和（勝治）氏、会員高橋嘉子氏を中心に、本学会会員、同市関係の若手・中堅声楽家によるコンサートが開かれ好評を博す。

◇　コールミント　ファーストコンサート

12 月 19 日（日）13 時半より　於磯子公会堂

合唱の好きな子育て中の母親が集い、５年前に結成したサークルの演奏会。合唱を楽しみながら、生涯学習の場として充実した活動を展開したいと考えています。指導は福田美知子会員。（横浜）

〔事務局より〕

◎第 81 回５月例会の研究発表募集。11 月 28 日締切。学会誌 33 号への投稿、学会通信への投稿もお待ちします(1 月末日締切)。演奏会、出版、CD 制作等近況もどうぞ。各々事務局まで。（川上勝功）

学会通信　第７号　平成１６年１０月２５日発行
日本声楽発声学会事務局
〒275-0005 習志野市新栄２－９－２　西村暁子方
TEL./FAX. 047-479-5701